

OVERSEA INFORMATION

タイ東北部の農業開発：注目される日本式「溜池」プロジェクト

取材記者 川村 史記

タイは通常、4つの地域的に区分される。すなわち、チャオプラヤ・デルタを中心にした中央部地方、チェンマイ盆地を中心にした北部地方、コラート高原に位置する東北地方、そしてマレー半島部の南部地方である。この4地域の中で、経済的に最も貧しいのが東北地方であるという。南部にムーン川(メコン川に注ぐ)、北部にチー川(ムーン川に合流)が流れる東北地方においては、台地の中でも比較的低い部分と、これら2つの川の流域(氾濫原)で稲作が行われている。しかし、海拔100~200メートルの台地に展開する地面は赤い色をしたラテライトで塩分が強く、農民を苦しめている。こうした砂質の土壌は雨期の雨水を吸いこむと、そのまますべてを川に流し込んでしまう。つまり、降った時には大洪水となるが、保水力がないため、その後降らなければ、瞬く間に旱魃になるという、歴史を繰り返しているのである。

こうした現状に対して、1982年以来、総合地域開発計画に沿って、チュラロンコン大学は、「溜池」のプロジェクトを展開してきた。

東播プロジェクト

チュラロンコン大学の本プロジェクトは、京都大学の技術協力と、JICA(日本海外協力機関)の資金援助を得て実行に移され、両大学の経済学者および農学者の共同作業で、対象地域が調査された。

選定に当っては、たびかさなる旱魃や頻発する洪水、塩害、脆弱な土壌に悩まされている典型的な貧しい村落が考慮され、具体的には、バンコクから約620km程離れた東北部コンケン県の一村落が選定された。『東播プロジェクト』という名称の由来は、日本の溜池が播州平野の東部に数多く造られたことによると聞く。

実際の工事に取り掛かる以前の難事業は、村民の説得であった。大都会からやってきた大学の先生が、農作業に馴染がないにもかかわらず、『旱魃や洪水の被害を回避できる農業を』といったところで、農民が信じるかどうかさえ覚束なかったという。しかも、村落共同体のいわば身内だけの作業に慣れた人々に、土地を提供させたいうえ、トラックや外国からの資金援助を活用し、村民自身の手で溜池を完成にもっていくよう説得するのは、なかなか根気のいる作業であつたらしい。

塩分を減らす工夫

溜池の規模は80アールほどで、4~5mの深さまで掘削し、地下水脈に達している。しかし、地下水には塩分が多く含まれるため、これをどのように処置するかが難問であ

ったという。そこで、溜池の土手を穿って、地表レベルにパイプを設置し、水田の雨水を溜池内に取り込める工夫を施した。つまり、地表の雨水で塩分濃度を薄める効果を狙ったわけである。また案内してくれた現地の人のお話によると、地中から上がってくる塩分を押えるために、ビニールを使った特殊な技術が池底に施されているとのことであった。コンケン県内にはこれまで、10個所以上の溜池が開発されてきているが、1982年から1983年に造られた溜池では、一回の雨期を経て10%も塩分濃度が薄められ、以降も年々減少し続けているという。しかも、こうした溜池は乾期に十分な水を確保し、作物の安定生産を図れるばかりでなく、テラピア等の魚を養殖する場としての新たな役割も担っている。

取材に訪れた時、プロジェクトの連絡事務所となっている建物の裏庭に、蜂の巣箱が置かれていた。そして日本では見かけぬ小さな蜂がこの巣箱を出たり、入ったりしてる光景が目に入った。担当のお話では、この蜂が溜池の土手に植えた作物の受粉に一役かっているとのことであった。

一目瞭然の成果

タイの季節は大きく雨期(5月~10月)と乾期(11月と4月)にわかれる、そして、東北部には、年間で1400mm程度の雨量が見込まれるが、前述のごとく、砂質の土壌は容赦なく水を川へと流してしまふ。こうした事実にもかかわらず、地域の9割以上の水田は、雨水に依存した農業を行っているのが現状である。しかも、田植後に雨が降らない雨期も少なくない。かかる劣悪な農業環境を打破する上で、今回のプロジェクトが少なからぬ意義を有することは確かである。説明によると、溜池プロジェクトは他県にもおよび、現在、全体で30以上の溜池が開発され、共同利用の恩恵に浴している農民も多いとのことであった。

我々が訪れた昨年の雨期は旱魃がひどく、プロジェクトの対象地区に隣接する、非対象地区では水田がひびわれ、稲は立ち枯れしていた。まだ青みの残っている稲を引き抜いて、わずかばかり水が淀んだ水田の一隅に、それを植え替えている諦め顔の農婦の姿は、溜池から引き込んだ水の満々と張った水田で、にぎやかに田植する婦人達の姿と際立ったコントラストを呈していた。

プロジェクトの技術的成功が鮮やかであればあるほど、技術のおよばぬ人々の蔭りは深いのかもしれない。いいかえれば、このプロジェクトが社会的に成功するかどうかは、広域の農民全体の利益へと、将来的に結び付いていけるかどうかにかかっているように思えてならない。限られた地域環境と資金援助の中で、東北部タイの農民達の目は、プロジェクトの今後の成り行きに注意深くそそがれている。



→

溜池はタイ東北部農村の稲作農業にとって生命線となっている